

イオン

登場人物 男1

男2

女

舞台には自転車置いてある。

男1、やってきて、ポケットを探る。

と、男2がやってきて、

男2 どこ行くんだい、ジョージ？

男1 どこ行くんだと思う？

男2 え、それだけおしやれしてるって事はまさか…、

男1 そう、アピタさ。

男2 それって、ショッピングセンターアピタ？

男1 他にどのアピタがあるんだい？

男2 一人で行くのかい？

男1 お母さんのお使いでね、トイレトペーパーと食器用洗剤を買いに行く。

男2 すごい。

男1 帰りにはドムドムのハンバーガーに寄ってくるよ。これは「褒美なんだ。

男2 ドムドムのハンバーガー美味しいもんな、いいなあ。

男1 僕はショッピングセンターアピタが大好きだからね、ついに独りで行ける日がやって来た、記念す

べき日なのさ。

男2 そうだよな、ジョージはショッピングセンターアピタが大好きだもんな。

男1 うん、僕ほどアピタが好きな人間は居ないと思うよ。

男2 僕も独りで行きたいなあショッピングセンターアピタ。

男1 ようやく僕も、一人前の男に認められたって事さ。

男2 ジョージってさ、名前がジョージだもんな、アメリカ人みたいだもんな。

男1 ジョージって伸ばすからアメリカ人みたいになっちゃうんだ。譲治って「う」を立てれば山本って

付けたくなるよ。

男2 あーあ、僕もアメリカ人っぽい名前が良かったな、そうしたら小学四年生でも独りでアピタに行け

たかもしれない。

男1 名前は関係無いと思うけど、じゃあいいよ、アメリカ人っぽい名前と呼んでやるよ。

男2 ホント？

男1 何がいい？

男2 キヤサリン。

男1 女の子みたいだな、

男2 じゃあアンソニーだ。

男1 君の名前は坂田三吉、まったく関連性が無いけどいいのかい？

男2 いい、僕はバナソニックが好きだからアンソニーだ。

男1 わ、すごい、アンソニーって意味かい？

男2 へへ。

男1 そいつはすごいトッチが効いてるぜアンソニー。

男2 ジョージ。

男1 アンソニー。

男2 自転車のカギ、無いの？

男1 あ、うん。どこに入れたっけな。

男2 ジョー。

男1 …おい、いきなり略し始めたなアンソニー。

男2 ジョイ。

男1 ヤダなあその名前。

男2 ジョジョ。

男1 こいつめ。

男2 あははは。

男1 はははは。♪そう、あれに見えるのは、アピタ。もお、幼いころから、ある。この辺の人達のちよっ

とした贅沢をする場所。

男2 ♪そう、この辺の人達の日常の買い物は、そう、この辺に商店街があつてアピタは特別な日に行く

習慣があつて、服を買ってカフェに寄って、来る。

男1・2 っ、あの日までは、おー！

男2 どうだどうだ

男1 なんだ、東の空から響くあのものすごい音はなんだ？

男2 あれは基礎工事の音だ。あのどっかいクレーンが、まるで恐竜が首を伸ばすかのように立ち上がるクレーンが、地中深く鉄の柱を打ちこんでいやるんだ。

男1 何を作ろうとしているんだい竹中工務店は。

男2 わからない…、なんだあの赤かピンクかわからない色をした看板は。

男1 何色って言えはいんだありやあ…。

男2 嫌な予感するよ、あれが完成するとなんだか大変な事になる。僕は今胸騒ぎが止まらない。

男1 大丈夫さ、この町にだって代議士が居るんだ。この町にとつてよりよい物が出るに違いない、きつとそうさ。

火花が上がる。

男1 …おい、夜中なのにあの辺の空だけ異様に明るいじゃないか。

男2 見ろ（指をさし）、アピタの黄色がひどく沈んで見えるよ。

男1 （その方向へは全く目を向けず）凄、豪華客船の様だ…。

男2 恐いんだなジョッキ、震えてるじゃないか。

男1 ああ、うん…。

男2 まったく、あんなものなんの意味があるって言うんだよなあ。

男1 （懐からチラシを取り出し）これ見て。

男2 え、なんでそんなの持つてるの？！

男1 うちのポストに入ってた。

男2 すごい。

男1 すごいよなあ。

男2 チラシの段階でこの大きさかよ…、アピタなんかちつさいもんだよなあ。

男1 うん。

男2 あ、ごめん。

男1 え、ああ、ううん。

男2 え、何それ、勝手にポストに入ってたの？

男1 そうなんだ。

男2 気持ち悪！

男1 （慌ててうなづき）気持ち悪いよねえ。

男2 …、ちよつと見せて。

男1 ダメダメ！僕だからなんとか持つていられるんだ。アンソニーにはまだ無理だよ。

男2 そうか、ジョーンズは独りでアピタに行ける程の力の持ち主だもんな。

男1 そうだよ。くっ…、

男2 大丈夫？重いのか？

男1 大丈夫だ、それより見てみる、鮮魚コーナー。

男2 安い！さんが10円？！

男1 開店セールだよ。

男2 これはアレだな、まずこの辺りの魚屋を根絶やしにする気だな。

男1 そういう事だね。

男2 君んちの近所、魚屋あつたよね？

男1 っ、ああ、まああそこはやつてるかやつてないかわからないくらいいつもシャッター閉まつてるから、大丈夫だよ。

男2 ああそうなんだ…。

男1 ココとは関係なく遅かれ早かれ潰れちゃうよあんな店。

男2 ああ、大丈夫かな、アピタは。

男1 まあ大丈夫だろう。

男2 …、なに？映画館も入ってるの？

男1 そんなに近づくな！目が焼けちゃうぞ！

男2 あ、ごめん！

男1 そうだ映画館だ、これからの時代は買い物物に行つて映画を観るんだ。

男2 ひどいよ、買い物客に映画を観せつけるなんて、どうするの買い物袋？映画館にネギ持つて入るの？

ヤダヨそんなネギ臭い映画館。

男1 そういう事だよね！

男2 気持ち悪いよ！

男1 気持ち悪いよね！  
男2 大丈夫だからねジョンソン、僕も一緒に戦うからね。  
男1 え？  
男2 僕達は絶対あのショッピングセンターには行かないでおこうな。だってアピタがあるもん、この町に二つもショッピングセンターは要らない。  
男1 アンソニー…。  
男2 (うなづく)。  
男1 でもあれはショッピングモールって言っらしいよ。  
男2 え、なに？…モール？どついう事？  
男1 わからない。  
男2 え、なに？盛るつて事？  
男1 盛る？  
男2 うん。  
男1 何を？  
男2 わかんないけど、盛ってるのはダメだろ。  
男1 あ、うん、ダメだよ。  
男2 盛ってるよコイツ。  
男1 やつぱりか、そうだと思うた！  
男2 それポストに入ってたんだよね？  
男1 そうなんだ。  
男2 君んちマークされてるんじゃないか？  
男1 恐い事言わないでよ！  
男2 だって勝手に持って来たんでしょ？  
男1 うん。  
男2 捨てなよ早く！  
男1 ああ、ちようどもう手が、アレだ。  
男2 貸して、僕が捨ててあげる。  
男1 ダメダメ！これは僕の仕事だ。僕が、この手でやらないと意味がない。  
男2 でももう君、手が、アレなんだろ。

男1 あ、うん。もう、手が、アレだ。  
男2 なに？  
男1 なんか、うっ…、  
男2 なに？  
男1 こんなのはビリビリに破り捨てて、もうポストの前に撒いてやる。  
男2 え？  
男1 それくらいしないとまた持って来るからね。  
男2 あ、うんそうだよな。  
男1 モールだからね、持って来るよ。すぐ、持ってくるよ。  
男2 ああ、うん。  
男1 くっ…、

男1、チラシを丁寧に畳んでポケットにしまう。  
女、自転車で通り過ぎる。

女 私ね、靴が欲しいの。もうボロボロになってしまったから新しい靴を買おうと思うの。だけどアピタにはもう目新しいお店はないでしょう。飽きてしまったの私。

男1、自転車のカギを取り出し、開ける。

男2 なあジャクソン、あの時の約束、憶えてるかい？  
男1 …もちろん、憶えてるよ。  
男2 そうか…。  
男1 忘れる訳ないだろう、この僕が。  
男2 そうだよな。  
男1 じゃあな。  
男2 どこ行くんだい？  
男1 だから買い物、トイレトペーパーとか、切れたから。  
男2 なあジョージア、僕は、「何しに行くの？」とは聞いてないんだ…。

男1 ああ、そうか。

男2 …。

男1 もちろん、アピタだよ。

男2 そうか。

男1 僕がアピタ以外どこ行くって言うんだ。

男2 …。

男1 ハハ。

男2 そうだよな。

男1 じゃあな。

男2 どこ行くの？

男1 …だから、アピタだよ。

男2 (顔を両手で覆い) アピタはそっちじゃないだろ！

男1 …こ、これは、まずグイツとしたかっただけだよ。ペダルを踏み込んだあとあつちにハンドルを切る作戦だったのさ。

男2 …。

男1 ヘイヘイ、アンソニー？一体どうしちゃったんだい？最近なんか変だぜ。

男2 ごめん、君が独りで رفتっちゃうんじゃないかなって、なんか僕だけ約束守って、バカみたいじゃないかなって、

男1 …おい、僕達親友だろ、親友を疑うなんてどうかしてるぜ。

男2 そうだよな、ごめん。

男1 なんだ、彼女でも出来たか？

男2 出来てないよ。

男1 女には気をつけるよ、あいつらしくて大きなショッピングモールに行きたがるからな。用も無いのに、行きたがるからな。

男2 …。

男1 じゃな。

男2 そうか、彼女が出来たんだな、あの、なんて言ったっけ？えっと、薬師みたいな名前の、

男1 マライヤさんは、彼女とかそんな…

男2 そうだマライヤだ。

男1 どこが薬師みたいな名前なんだ。

男2 あのマラカスに言われたのかい？バカみたいな、ずんぐりむっくりしたチビの、頭の悪そうなおばさんに、

男1 マライヤさんはあ見えて国立大出てるんだ。僕達よりずっと頭がいいよ。

男2 大きなショッピングモールに行きたいって。

男1 バカバカしい。僕はもう行くよ。

男2 僕もついて行っていい？

男1 おいアンソニー、どうして僕を疑う。僕はそのアピタ以外行かない。僕はアピタが大好きな人間は居ないって知ってるだろ。僕はアピタに行くんだ。僕は、アピタに、行く。

男2、自転車の空気を抜く。

男1 あーひどいよアンソニー、自転車は何も悪い事をしていないのに空気を抜くなんて、あー、自転車が泣いている。

男2 今は自転車じゃないだろ！（しゃがんで泣いた）

男1 …アンソニーごめん、僕が君を不安にさせたからだね、僕のこれまでの物言いが悪かったんだね、

男2 …。

男1 よおしわかった！今から僕が、どれほどあの巨大ショッピングモールの憎んでいるのかという話を

してあげる。

男2 …。

男1 うちの二軒隣には、肉屋がある。そこがもう、今にも潰れそうなんだ。その向かいには八百屋がある。そこももう危ない。この空の色はなんだい？土色になるとこの辺りはひどい渋滞だ、排気ガスだよ。全部あのショッピングモールのせいだ！

男2 排気ガスの事はちよつとわからないけれども、

男1 あのショッピングモールのせいだ！

男2 君たちの近所のお店は遅かれ速かれ潰れるって君言ってたろ？

男1 うん。

男2 じゃあショッピングモールは関係ないんじゃない？

男1 うん。

男2 ……？

男1 でもそこで買い物してた人だつて、居るんだよ。

男2 え、君んちは？

男1 ウチはそこでは買わない。

男2 ……。

男1 いつもアピタに行くもの。

男2 まず君んちが買に行かないから潰れちゃうんじゃないか？

男1 その肉屋は、肉屋なのに魚も売ってた。

男2 え、凄い。

男1 向かいの八百屋は、八百屋なのに魚も売ってた。

男2 魚が大好きなんだな、君んちの近所。

男1 あのショッピングモールよりずっと安いに違いない、結果潰れそうなんだから。

男2 うんそれはだからまず君んちが

男1 なんだ？

男2 魚屋は何やってるの？

男1 魚屋は、魚だけを売っている訳じゃなかった。

男2 何を売っていたの？

男1 知らない。

男2 知らないの？

男1 君には関係ない物さ。

男2 怖いよ、何？

男1 これが何を意味しているか君にはわからないだろう。魚屋でもないのに魚は無いかと聞かれたら魚を置く、これが本当の商売だ。人と人の繋がりで成り立っているんだ商売とは。

男2 うん。

男1 町から一つのお店が消えてしまおうと言う事はその繋がりを断られたという事だよ。自分にとつて知らないお店が潰れたとして、それは知らないからいいのか、知らない事は無い事と同じなのか、どこかで繋がっているかもしれないのに。

男2 ……はい。

男1 何屋かもわからないお店があったつていいじゃないか。何屋かわからないお店が何屋かもわからないまま潰れていく。そういう事を心配出来ない人の方が心配だと思うね僕は。

男2 うん、わかった。

男1 何がわかったんだ？

男2 ……何がわかったのかは、今度 メールで送る。ロじゃ上手く伝えられないんだバカだからまあ。

男1、ズボンの尻ポケットに納められたイオンのチラシを地面に置く。

男1 踏んでみる。

男2 ……え？

男1 本当に分かつてるなら、踏んでみる。

男2 ……これをかいて？

男1 まあアンソニー、僕らには僕らのやるべきことがあるだろう。僕ら二人がいがみ合っても喜ぶのはあの何色かわからない看板だけなんだ。僕を信じてくれよアンソニー。

男2 うん、なんか、ごめん、そこまで、その…、

男1 僕はもう、アピタにしか、行かない！

男1、力強くチラシをふんづける。

男2 あー！

男1 奴は木を植えていると公言しているが、奴が一つ建つたびにどれほどの木が切り倒されてるんだ！

男2 ジョブズ、もうわかったから、ごめん。

男1 それだけは許されない事だよホント！（足をぐりぐりする）

男1、走ってどこかへ、

男2 どこ行くの？

男1 空気入れを持つてくる。僕はアピタで買い物をする。アピタで、凄いお金を使つてやる。

男2 ジャニーごめんよー僕はいつからこんなに心が狭い人間になつてしまったんだ。親友の君を疑う

なんて。

男1、空気を保持して。

男1 君は何も悪くない、悪いのはあの赤かピンクかわからない色のせいだ。あの色が僕らをイラつかせる。

「チリンチリン」

男1 …。

男2 …なんだ？誰かが呼んでる。

男1 ただの自転車のベルだよ。別に誰も呼んでないよ。

男2 あ！僕は本当にダメだ。この世に起こる全ての事に疑心暗鬼になっちゃっんだ。

男1 思春期だからな、お互い様さ。

男2 君も僕を疑っている事があるのかい？

男1 あるよ。

男2 なんだい？

男1 どうして君は僕の名前を統一してくれないんだ。

男2 え？

男1 一体君は僕をなんて呼びたい？

男2 だから君は、…ジョンだよ。

男1 ジョンか。僕の名前はジョーシナンだけじゃあいいや、ジョンならジョンで。たまにジャクソンとか言うのやめてくれ。

男2 ジャクソンなんて呼んでないよ。

男1 呼んでるよ。ジョンソンとかも言うよ。

男2 え、それは本当かい？ジョニー。

男1 ほら。

男2 あ。なんだったかな、君の名前は。

男1 ジョンだろ？

男2 そうだ、ジョンだ。

男1 そんなに覚えられないならアメリカ人っぽい名前呼び合おうのはもうやめないか。

男2 覚えたよ。もう間違わない。

男1 そうか。

男2 ごめんよ、じよ…

男1 ん？

男2 ジョン。

男1 こいつめ。

男2 あははは！

男1 あははは！

「チリンチリン」

男1 …。

男2 やっぱり誰かが呼んでるぞ？

男1 呼んでないよ、自転車のベルだもの、意味もなく鳴らしてみたい時だってあるぞ。

男2、「チリンチリン」と鳴らす。

と「チリンチリン」と返って来る。

男2 …返事したぞ。

男1 …たまたまたよ。

男2、「チリンチリン」と鳴らす。

と「チリンチリン」と返って来る。

男2 たまたまじゃない、これは絶対返事してる！ジエイソン、君やっぱりあの女と待ち合わせしてやがったな、あのマラカスト、待ち合わせしてやがるな！

男1 落ちつけよアンソニー！違うんだ、僕の話聞いてくれ。

男2 いいや聞かない。誰が悪魔の声に耳を貸すもんか。そうやって澄ました顔で平気で嘘をつく君は悪魔に違いない！

男1 僕がマライヤさんとステディな関係だとしてもだ、それと僕らがあのショッピングモールに行くことは直接結びつかない。全て君の妄想なんだ。

男2 僕は知ってる。ああいう女は金士の深夜、必ずドンキホーテに現れる。そしてそういう女は日曜の昼間は必ず巨大ショッピングモールに姿を見せる。ドンキホーテに現れるのはまるで別人の格好をしてね！奴らは買い物に行くんじゃない、遊びに行くんだ。金も持ってなくせにセレブ気分を味わいただけの為だね。

男1 マライヤさんはそんな女じゃない。

「チリンチリン」

男2 うるさい！マラカス！マラカス！デブ！

男1 (腰にタックルをして) マライヤさん逃げろ！すぐにここから逃げるんだ！

男2 さすが君はラグビーをしているだけの事はあるね、まるで動かない。

男1 僕はこの体格でフォワードだからね、それにはちゃんと理由があるのさ。

男2 僕はこれでも将棋部なんだ、体力では君に敵わない。だけど将棋部には将棋部なりの、戦い方があるのさ(脇をくすぐる)。

女、自転車を押してやって来る。

男1 止めろーや、やめろー僕は脇が世界で一番弱いんだ。

男2 それはどついう事なんだい、世界で一番脇が弱い人間という意味か、世界の中で脇のこちよこちよよりも弱い物はないという意味か、どつちなんだ！

男1 両方だ、ひいー！

女 譲治？譲治なの？

男1 見るなマライヤさん！頼む、こつちを見ないでくれーあははは、幕を、誰か速く幕を、だははは！

暗転幕がどンドン降りてくる。

女 何を遊んでいるの？さあ、早く行きましょう。

男2 どこへ行くんだ！

女 あなたは譲治のお友達ね。

男2 どこへ行くんだ言ってみろ！

男1 言うな！わかった、すぐに行くから。だから君は何も言わなくていい！あははは、あははは、

女 私ね、靴が欲しいの。もうボロボロになってしまったから新しい靴を買おうと思うの。だけどアピタにはもう目新しいお店はないでしょう。飽きてしまったの私。

男2 やっぱりかーやっぱりか貴様！

男1 あははは、ごめん、ごめんよアンソニー！あははは、あー、僕はもう呼吸困難になってしまっあはははは、

女 そして石鹸も欲しいわ。最近肌が荒れてしまって、天然の植物しか使っていない石鹸が売ってるらしいわ。それは本当に天然の物だから食べても害はないらしいのよ。素敵ね。でも私は食べれないわ。だってそれは石鹸だもの、洗顔をするわ。それで私の肌は元通りツルツルになるはずなの。譲治だってボロボロの肌よりはツルツルの肌の方が好きはずよ。でもそれはなかなか売っていないのよ、駅前のレストランでも見えてみたわ、けども売ってなかった。

男2 お前はチョココレートの食べ過ぎなんだよ！デブ！デブ！

男1 あははは、あははは、はははは、

女 ひどいわね、私チョココレートなんか食べないわ。

男2 僕だっ行ってきたいのに！ずつと行きたかったのに！

男1 あーもおー

幕の向こうで鈍い音。

女 アンソニー、あなたはいつも私をそんな目で見ていたの。まるでアメリカの子供のようにいつも口の周りをチョココレートで真黒にしているとでも思ってた？失礼しちゃう。

男1、空気を力なく落とす。



女 そうだね、アメリカの子供のような大きなチョコも売ってるわきつと。だってあんなに巨大なショッ  
ピングモールですもの、見たこともないくらい大きなチョコレートが売ってるわ、それはそれは甘いの  
よ。そうよアンソニー、あなたも一緒に行きましょうよ。行った事ないのでしよう？こんなに近くにあ  
るのに私達は一度もあそこへ行ったことがなかった。私のお友達の敏子さんは、もう毎日のようにあそ  
こに買い物に行ってるんですって。日用品から家電、おしゃれな小物までなんでも売ってるらしいわ。

敏子さんが言うには車も売ってるらしいのよ。信じられる？ショッピングモールに車よ！愛知トヨペッ  
トよ！車を買って、どうやって店の外に持ち出すのかしら。さすがに運転は出来ないでしょうから、押  
して帰るのねきつと。あー、早く見てみたいわ、吹き抜けの天井、柔らかい床、映画館へと通じる長い  
長いエスカレーター。さ、譲治、またなの？早く行きましょう。私もう待ちくたびれてしまったわ。

男1 …ごめんマライヤさん、僕 急用が出来てしまったんだ。

女 …え？どうしたの？(暗転幕の下からのぞきこもつとする)

男1 見なくていい。頼む、見ないでくれ。君に迷惑をかけたくないんだ。

女 そんな急に、どうして？

男1 …あー、今日こそは行けると思ってたのにな、はは…。

女 アンソニーは？

男1 アンソニーは、もう帰ったよ。

女 そう。あんなに楽しそうに笑っていたのに、随分気分屋なのね…。

男1 ごめん、今日は、本当に、ごめん。

女 …私ね、先週から楽しみにしていたの。

男1 うん、僕もだ。

女 靴が欲しかったのよ。あと、石鹸。

男1 じゃあ、今度一緒に買った時、それを買ってあげるよ。

女 本当？

男1 本当。だから今日は、ごめんね。

女 …大丈夫？具合、悪いの？

男1 君と一緒に来たかったよ、本当に。

女 …仕方ないわね、急用なら。

男1 一人で、行くのかい？

女 行かないわ、あなたと一緒に行く。

男1 そう。

女 アピタに行くわ。

男1 そう。

女 アピタなら、一人でも平気なもの。

男1、引つ張ってとととと暗転幕を降りて行く。

男1 じゃあね、マライヤさん。

女 じゃあね。

男1 すぐそこにあるのに、みんな楽しそうに行ってるのに、

女 え？

男1 行って見たかったなあ、僕も。

女 …譲治？

暗転幕が降りきる。

女は自転車を押して歩いて行く。

途中「チリンチリン」と鳴らしてみる。

と、幕の向こうから「チリンチリン」と返って来た。

女は安心し、また歩き出す。

もう一度「チリンチリン」と鳴らしてみた。

今度は返って来なかった。

心配そうに振り返る女。

上演記録

2013年2月9日～11日 劇王X～天下統一大会～長久手市文化の家風のホール

2014年6月19日～22日 オイスターズが送る珠玉の短編集「劇玉II」／損保ジャパン人形劇場ひまわりホール

この戯曲の著作権は、作者である平塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」どうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oysters@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp)